

第3期札幌文化芸術円卓会議 第2回会議

会 議 要 旨

日 時：平成26年3月3日（月）午後6時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下1階 1号会議室

1. 開 会

○事務局 皆様、今日は、大変お忙しい中をお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

定刻となりましたので、ただいまから、第3期札幌文化芸術円卓会議の第2回目を開催いたします。

なお、鈴木委員から都合によりまして出席できない旨の連絡がありましたので、ご報告いたします。

それでは、早速、北村委員長、南副委員長、よろしくお願いいたします。

2. 議 事

○北村委員長 皆さん、こんばんは。

どうぞよろしくお願いいたします。

前回、1回目の後、皆さんにアンケートをお願いしまして、札幌市に表のようにまとめていただきました。どうもありがとうございます。今回は2回目ですけれども、私たちの任期は2年あるそうです。まだ7回から8回の会議がありますので、すぐにこのことについて詰めて議論をする段階ではありません。きょうも、自由にブレインストーミングのような形で話題を上げていただければと思います。

せっかく皆さんにお書きいただきましたので、皆さんのご意見をお伺いしながら、何か気になる点などがあればお互いに話を振って議論していければと思います。どういう意図でお書きになったのか、石川委員から順番にご説明いただければと思います。

○石川委員 前回の会議のときに第1期と第2期の内容を読ませていただいて、説明も受けました。書いてあることは理念として非常に完成されていると思いますので、今回の第3期は、私個人として、もっと具体的な話をしたいという思いがあります。

どんな具体的な話かということ、前回の会議のときに札幌で文化芸術活動をする上での問題点やいろいろな提案がありましたね。例えば、アーティストと行政の関係やアートの情報をどういうふうに札幌市が主体的に伝えるか、創造都市としてのPRをしていくかといういろいろな問題点が出たときを考えたときに、私としては、それはメディアがあれば結構解決できるのではないかという思いがあります。やはり、今の時代ですから、インターネットなどを活用したインターネットメディアを使って、将来的にはリアルな建造物としてのアートセンターが想定されているわけですけれども、インターネット上のアートセンターというか、何か知りたい情報などを得られるコミュニティがつくられるようなメディアをつくりたいと考えて、今回の提案をさせてもらいました。

では、会議でどういったことを話し合いたいかということ、仮にインターネット上でメディアをつくったときにどういう情報を載せるべきか、どういったやりとりを市民としていくかです。僕個人としては、500m美術館のように、ふだんはアートに興味・関心のない人にどうやってPRしていくかが一番大事なことだと思っています。ですから、サイト

としても、本当にぱっと気軽に見て、札幌市のホームページを別の用事で見たついでにちょっと見てみて、こんなものもやっているのだなというように、普通の人といっっては何ですが、一般的にアートや芸術に余り興味のない人がそういったことに関心を持てるようなメディアをつくれればなと思っています。

以上です。

○北村委員長 ありがとうございます。メディアを積極的に活用しての広報活動や、一般市民の方々に関心を持ってもらえるような具体的なあり方をこれから検討してみてもどうかということでした。

今、札幌市のホームページ上にいろいろなサイトがあると思うのですがけれども、今おっしゃっていた500m美術館のサイトもありますし、札幌市の観光文化局のページにも円卓会議のこれまでの経緯なども全部載っていますが、札幌市ではどれぐらいのアクセス数があり、見られているのかということは大体わかっているのでしょうか。

○事務局 手元の資料ではどれだけアクセスがあるかはわかりません。ただ、観光文化局ですので、観光コンベンション部に、「ようこそさっぽろ」というホームページがあります。そちらにも文化関係の案内を載せまして、観光客の方にもPMFやシティジャズをいつやっている、どんなことをやっているということを気楽に見ていただけるようなPR活動等々はやっております。

○北村委員長 フェイスブックのページもありますし、ブログのページもあります。それがどれだけ積極的に、また、有効に活用できるのかも考えなければいけないですね。

富田委員、そういうことにお詳しいのではないですか。

○富田委員 名前のとおりですけれども、「ようこそさっぽろ」は、外に向けて発信しているように表向きは見えるかと思います。ただ、今ここで話していることは、札幌の人たちも認知して、知っている人は知っていることですよね。「ようこそさっぽろ」はリニューアル中でしたか。

○事務局 もうオープンしています。

○富田委員 ちょっと雰囲気を変えてやられていると思うのですが、やはり、自分たちが楽しんでいくということを発信できるような方向づけでいければ、自然と観光客にもというような順番でやれたらいいと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

石川委員のネット上のご意見では、そういうものを活用して、例えばアートセンターなどをサイバー的に作り上げていくということですね。そういう形も当然あり得るかと思えます。そういうご意見については、また後でいろいろ話し合いたいと思えます。

尾崎委員はどんなことをお考えでしたか。

○尾崎委員 テーマについて、前回、1期目と2期目の資料を見させてもらって、何といえうまく伝わるのかちょっとわからないのですがけれども、言葉をきれいにまとめたなと思えますが、これが果たして具体的にどうなっていくのかがぼやけてしまって、わかりま

せんでした。それをこの会議で仕事にしていくのはどうかと思います。

僕は、舞台の仕事をしているので、舞台という具体的なものをつくっているのですけれども、そういう具体的なものにしていかないと、どうにも抽象的で、何だかもやもやした感覚にしかならないような気がするのです。それは、市民にとってもぼやけて伝わってしまうのではないかと考えていますので、どれだけ具体的なことに踏み込んでいけるのかを話し合いながら、少しずつ進めていければいいのかなと前回の会議の後に思いました。

ですから、テーマを決めないことには進まないのだろうと思います。それを1個にまとめるのも暴論のような気もしますが、うまくまとまっていないのが現状です。何か具体的なことをしていきたいなと考えております。

○北村委員長 ありがとうございます。

私たちの円卓会議のミッションはどのような性格なのかも一緒に考えなければいけないと思います。つまり、長期的あるいは理念的な事柄、5年先や10年先、ひょっとしたら100年先の札幌の芸術文化のあり方を考えることもミッションかもしれません。また、来年のことをどうするのか、あるいは、今の問題をどうやって解決するのか、どうすればいいということについても議論しなくてははいけません。ですから、話の焦点をどの辺に合わせていくか、私たちの議論の焦点を合わせていくのかは、今回だけではなくて、追々、皆さんの中で共通の理解を持っていかなければいけないと思います。ここは100年先のことを考えて議論しているのだ、いや、今起こっている問題をちゃんとやらなくてはいけないというところのすり合わせが後々には必要になってくると思います。

尾崎委員が考えられている具体的なテーマとは例えばどんなことでしょうか。舞台芸術の札幌における位置づけをもっと活発にするなどですか。

○尾崎委員 やはり、札幌市の文化芸術を推進していくための大きな機関になるであろうアートセンターなどが今まさに話し合われている最中だとは思いますが、なかなか見えてこないのは僕としてはちょっともどかしいと思っています。そういった機関を具体的にどうしていくのか、どうすれば札幌市の価値を高めていく機関になるのかを話していくとか、新しくできるホール、それもそれで検討委員会ができて、そこで議論されているのでしようけれども、そういった具体的なことをしていくことの積み重ねなのかなと考えております。

○北村委員長 ありがとうございます。

アートセンターのことには石川委員もご関心があるんですね。ただ、僕が一つよくわからないのは、アートセンターやホールのこと、また、コミッションのことなど、いろいろな話題が出てくるのです。行政のそれぞれの部門でやられている話として、例えばホームページなどをごらんくださいというのであれば私たちはわかるのかもしれないですが、横の情報がなかなかないのです。あそこはあそこでやっている、ここはここでやっている、私たちは私たちがやっているということです。それでは、みんなで一緒にやってみればいいのか、あるいは、それぞれの情報をもっと共有できればいいのではな

いかということがあれば、もっと風通しがよくなるのかなとも思ったりするのです。それはお役所さんなののでしょうかといっっては大変失礼ですけれども、市役所の観光文化局では情報が共有されている部分はあるわけですか。

○事務局 今、複合施設のお話があったと思うのですけれども、尾崎委員がおっしゃるように、高機能ホールについてどういった運営をしていこうか、アートセンターを実際にどういったものにしていくか、理念的なものはでき上がっているのですけれども、その中で具体的にアートセンターは何をやっていって、どういう方向性で今後進めていくのかということは、まさに検討会議で考えている最中です。

そのほかにも、複合施設、アートセンターを考えるに当たっては、自分たちの系の業務だけでは把握し切れませんので、文化部内でしっかりと情報共有をして、それを発信しようとしております。

ただ、委員がご指摘のとおり、それが外にしっかりあらわされていないということは、横のつながりがまだ少し薄いのかなと思っていますので、そこは、今後頑張りますとしか言えないのですけれども、横のつながりが見えるように今後取り組みたいと思います。よろしくをお願いします。

○北村委員長 尾崎委員の今後の進め方のところで、文化部の職員も市民であることに変わりはありませんし、一緒に議論ができるといいと書いていますので、ぜひ、私たちと一緒に、文字どおり、円卓になって議論していただければいいと思います。私たちがアートホールのことについてこうだと言って、でも、あっちではこうだと言って、そこで矛盾なりが出ています。それが出てもいいと思うのですけれども、それをどういうふうに調整していい方向に持っていくのかを考えなくてははいけません。その辺の情報というか、議論をお互いに行なってみたいですね。

清水委員はいかがでしょう。

○清水委員 前回、第1期と第2期の議論の内容やまとめた意見の説明をいただきました。そして、私の考えとしては、第1期でできたものと第2期でできたものを今さら議論してもと思います。これは否定ではないですけれども、もっとよいものにしようと考えても、メンバーも違うし、非生産的なのではないかなと思うのです。また繰り返しになって無駄だと思うのです。私の目指すところは、第1期のメンバーも第2期のメンバーも同じ理念で進んでいると思うので、別なアプローチやそこになかったものを見ていくような議論にしてはどうかと考えました。

何となく情報発信や市民の共通認識というキーワードがすごく多かったと思います。私も札幌市に訪れる人も含めて、やはり住んでいる住民の認識を高めるという言い方は余りよくないですが、アーティストにしてもサポーターにしても、潜在的なものを掘り起こし数や力をふやすことを目指すような何かを議論することを考えました。

具体的にこんなこととはということで、歌は重要だと最近思っています。小さいころから「創造都市さっぽろ」などと歌っていれば、あっ、私たちは創造都市市民なのだという認

識が植えつけられるかと思いました。

ただ、具体的なものが必要だとも思っています。ここでどこまで具体的な話をして、実際にそれを動かす予算をとったり、このぐらいの予算でこのぐらいのことをできるという話がここには上がってこないのです。私の言ったことはちょっと細か過ぎるのですが、具体的につながる理念や、抽象というのもちょっとよくないのですけれども、この会議でできることをうまく見きわめて、早目に狭くしたほうがいいと思います。

どれも重要で、すごく幅広いところを扱わなければいけないと思っていますのですけれども、私たちの任期は2年しかなくて、時間も2カ月に2時間ということ踏まえた上で、早目に切り捨てるものは切り捨てて、今回はここだけをやろうというものを見つけられたらなと思っています。

○北村委員長 それは、例えばアートセンターのことがやはり気になりますか。

○清水委員 そうですね。やりたいこととしては、アートセンターとアーツカウンシルについて議論できたらいいなと思います。私は専門性がないので、知的好奇心が刺激される新しい喜びだと思うので、それはやりたいです。

○北村委員長 ありがとうございます。

清水委員は、前回、そして今回もそうですけれども、一市民としてこれが芸術なのだというのに気がついていなくても、私たち札幌市の周りには、芸術とは言えなくても、とても楽しい事柄がいっぱいあります。そういうことに一人でも多くの人に関心を持ったり関与するなど、気づくようなことが必要ですねということをおっしゃったと思うのです。きょうのお話の潜在的な力を高めるとか市民の認識を上げるというところは、そういうところになるのでしょうか。ありがとうございます。

今ありましたように、長いといっても2時間の会議で、無限の時間があるわけではないので、早目に何かテーマを絞ってやっていけばいいのではないかというお話でした。

富田委員はいかがですか。

○富田委員 僕は、共生、共創という概念が示されたということから、市民が参加して行われるものであるということを考えながら、これを示しました。第1期で産業化という言葉が出てきています。これは、前回、石川委員が僕は違和感があるとおっしゃっていましたが、僕の中でもどういうふうにアートが産業になっていくのかということは、まだまだ疑問符がありまして、ここは一つテーマになるのではないかと考えています。

僕が言いたいと思うのは、今おっしゃいましたけれども、これから札幌を担っていく人材です。やはり人だと思っているので、アートマネジメント、キュレーター、リサーチャー、アートでいえば、そういう人たちを育てることです。

また、先ほど子どもとおっしゃいましたね。教育という言葉を出すとおこがましいところもあるのですが、どのように未来を担う子どもたちに文化芸術を示していくかは非常に重要だと思っています。そして、教育機関との連携でこれをやっていくことによって、人が主となって札幌らしさみたいなのが見えてくるのではないかと思います。ですから、ア

ートセンターでいえば、そういうところをつないでいく役割を担っていけばいいのではないかと考えています。

○北村委員長 ありがとうございます。

第1期と第2期の見直しについては私も考えていますし、南副委員長も産業化については前回お話になっています。清水委員が言うように、第1期と第2期に対して私たちがどういうスタンスをとるのかということですね。全然関係ないといえれば関係ないので、私たちは私たちの好きなように議論をすればいいと思うのです。ただ、第1期と第2期の積み重ねがあるので、それを知らないということはないと思います。知った上で、私たちはどうということをやりましょうかということになると思います。

それから、人材の育成についてです。

アートセンターにそういう人材の育成の機能をつけるというか、求めているというか、それはとても大事なことです。アートセンターについて第2期で集中的に議論されているみたいですがけれども、それが具体的にどうなるのか、あるいは、石川委員が言うように、それもバーチャルな形でどんどんどんどん進めればいいのかということになるのか、やはりフェース・ツー・フェースの形で人がちゃんと介在して、見えるところでやればいいのか、いろいろな考え方があると思いますけれども、そういう問題が出たのかなと思いますね。

山田委員はいかがでしょう。

○山田委員 私は、今回、宿題について考えたときに、悩んだのは、第1期、第2期を踏まえてなのですがけれども、それをこの会議で発展させていくには何がテーマかということをととうと絞れなかったのです。札幌市には、これまでのお話にもありましたけれども、集まった人たちの会議もあるし、複合交流施設の会議もあるし、1期、2期を踏まえての芸術基本計画の会議もあります。そうすると、それこそ、今、ちょっとありましたけれども、じゃ、ここの会議はどこかということで事務局に悩みを相談して、思うところできいと事務局から回答を受け今の状態になっています。

そこで、そのテーマと今後の進め方について、今、私が見えるところで書いてみました。

まず、札幌市全体では創造都市ということですね。それにかかわるものとして、複合交流施設、アートセンターなどがある中で、札幌にある資源とは何かといたら、いろいろなジャンルのアーティストが多いと思ったのです。美術から音楽から、まさにいろいろです。近いところでは、例えば、職場のスタッフの中にも、こぢんまりとしたギャラリーで絵画の個展をやる方たちもいます。せっかくあるものなので、そういった方たちを創造都市さっぽろの一つに交えることが大切だと思ったのです。

そこで、行政的にかかわる部分と、市民の動く側でかわる部分があります。そのときに、サポートしてほしいアーティストは誰か、あるいは、どの人だったらいいか、そういうような情報があったらいいなと思ひまして、そこに書いてみました。

そう見ていると、今、札幌市のホームページにアーティストバンクというものを見つけたのです。そこには、試行的に、音楽家でしょうか。そこまででまとめて、あとはこれか

らですということなのです。そうすると、そこも、せっかくあるホームページのコンテンツがあるので、今後、その充実が大切で、せっかくあるコンテンツを充実させるのがいいと思います。

ただ、このときに、アーティストといっても、まとめ方がすごく難しいと思うのです。言葉が悪いのですけれども、自称アーティストから本格的なアーティストまでですね。その評価ということになるとまた別なので、それは抜きにして、とにかく具体的なものづくりをする方を紹介できる情報をまとめることが一つです。それがひいては先ほど申し上げましたアートセンターとかほかのいろいろな組織にもつながって、今度は一般市民とされている方が自発的にアーティストになることも期待したいです。

そんなところを会議の中でまとめるといいますか、一つの話題として話し合えるといいなと思いました。

○北村委員長 ありがとうございます。

先ほども言いましたように、最低限、私たちの円卓会議がどういうミッションを持っているのかということは、今日でなくても、近々には私たちの中で共通の理解を持っておきたいと思います。

それから、アーティストバンクというのは、1年半ぐらい前でしょうか、こういうものを作りたいのだけれども、どうしたらいいでしょうかと相談を受けたことがあります。どういうものなのか、皆さんにご説明いただけますか。

○事務局 アーティストバンクは、現在、試行段階となっております。山田委員がおっしゃるように、音楽分野のアーティストのみを登録している状態になっています。ただ、今、稼働率としてはそんなに使われていないので、分野の拡大やアーティストの拡大について内部で検討している最中でございます。

○北村委員長 ありがとうございます。

問題は、どれだけ需要を喚起できるかだと思います。今使うとしたら、結婚式でパーティーをやるのだけれども、演奏家を全然知らなくて、つてがないので紹介してほしいといったときに、そういうところと言えばこういうピアニストがいますよとか、こういう演奏団体がありますよということをご紹介いただければと思います。

それもとても大事だと思うのですけれども、創造都市さっぽろで考えているアートの産業化ということは、ちょっと質が違う気がするのです。教育の問題でもいいし、社会的な問題でもいいし、いじめの問題をどうするかというときに、アーティストがその学校に行って、1年間、いじめ問題のプロジェクトに取り組むなどですね。アートが社会の中で果たす役割というか、需要というか、そういうものをもう少し掘り下げるとするか、広げないと、いつまでたっても音楽家は結婚式のときの演奏だけで、舞台をやっている人はコントをやってその場をにぎわすだけだと少しも創造都市っぽくないです。アーティストバンクを見ていて、そんな気がしていたのです。札幌だけではなくて、ほかの都市でもこういうバンクみたいなものを運用されていると思うのですけれども、それが果たしてうまくい

っているのかどうかちょっとよくわからないというか、アートの需要をどの辺に求めていくのかということをもう少し考えなければいけないと感じています。

尹委員はいかがですか。

○尹委員 皆さんと全く同じことになってしまいます。確かに、本当にきれいにまとまった内容を今まで論じてきて、具体的な部分がこれから大事になってくるのではないかと思います。

私の勉強不足なところがあるので、質問を交えて話をしたいと思ったのですが、例えばPMFなどいろいろな行事があると思うのですが、それは、いろいろなところで企画をしているのか、こちらの行政のほうで企画して全てを把握して調整しているのか、どうなのですか。

文化芸術にかかわる企画は小さいものから大きいものまでであると思うのですが、そういったものを行政のほうからやっってくださいとか企画されているのか、こちらから持ち込んでやっているのか、そこら辺はどうなのでしょう。例えば、舞台でしたら、舞台をつくる人たちというのは、こういう舞台をつくりたいということで初めて形になると思うのです。そういうものをこちらの部署で管轄されて全て網羅されて、会社だったら企画してCMするという順序があると思うのですけれども、札幌市はどういう形がとられているのかわからなかったで、聞いてみたかったです。

○事務局 いろいろな文化イベントがありまして、札幌市が主催しているものもありますし、札幌市が補助金を出しているイベントもありますし、札幌市の名義後援という形もありますし、札幌市がほとんどかかわっていないといいますが、文化団体が自主的にやっているものもございます。

かなり大きなものについては、行政がかなり力を入れないと支えることができないと考えていますので、行政がやっているものもあります。あとは、こんな事業をやりたいという申請が上がってきて、札幌市が補助金を出したという事業もございます。

○尹委員 ありがとうございます。

先ほども皆さんがおっしゃっていたのですけれども、具体的に企画する部署が一つにあるというのか、ここが企画しているとわかればやりたいというものだったり、逆にこういうことをしていきませんかと投げかけてくれたほうが良いと思うのです。このようにテーマの話をして、文化芸術がすごく大切だということは、私たちが共有してわかっていることですが、それをどうやって市民に浸透させるかということです。浸透させることは、こちらから話していかないと難しいと思うのです。

ですから、私が思うのは、文化芸術は気づけば横にいたじゃないですが、例えば、日本の方がオペラを見たら、なじみがないので異質に見えたり、フェギアスケートならなじみがあるのでおもしろく見られるのですけれども、冬季オリンピックで全く注目されない競技だとなじみがないから見ないということがあります。

そういう考えでいくと、文化芸術も、小さいころから気づけば普通にバイオリンを聞い

ていたとか、バレエを見ていたとか、気づけば何か目にしていたからなじみがあるというように考えたときに、先ほど北村委員長もおっしゃったように、学校、幼稚園、保育所とか子どもだと思ふのです。先ほど、パーティーで音楽家を呼ぶと言っていました、そういうパーティーだけではなく、企画するところから学校などにどんどん派遣して行って、例えば演奏会があったり、オペラがあったり、小さな演劇があったり、きょうはひな祭りで、一時保育で小さい子どもを相手にお琴を弾いて、お茶をたてていました。そういうものに小さいときから興味がなくても接していれば、それが違和感なく感じられると思ふのです。

この間、テレビで建築家の安藤先生がおっしゃっていたのですけれども、ヨーロッパのほうですごく大きな博物館か美術館を何十億、何百億円で依頼された。ただ、経済が破綻しているのにこんなにお金を使っていいのかと質問したところ、その質問自体の意味がわからないということなのです。ヨーロッパの方々は、小さいときからなれ親しんで、普通なので、そこにお金をかけるのが無駄ではないかという発想自体が貧相なのです。その感覚は、小さいころから街並みがアートのような国なので、うまく表現できないのですけれども、そういうふうにしていければなと思ふのです。

ですから、やはり、子どもたちに視線を当てて、気づけば横に文化芸術があったというところで、子どもたちにどんどん浸透できるようにする。言葉などを大人が考えて理論的に言うのではなく、具体的に見せてあげる、聞かせてあげる、感じさせてあげることを企画するほうが手っ取り早い気がします。ですから、私たちの会議の目標というか、目指すところが役所のほうにあると思ふのです。役所のシステムはよくわかりませんが、今からでもいいなら、テーマというか、目指すところ、話し合うところをひっくり返して、今、ここで決めて、もうちょっと実のあるものにするほうがいいと思います。

これだと、階段ではなくて、平坦な道をずっと歩いているような気がします。PTAもそうなのですけれども、最後に総括してこうしたほうがいいね、ああしたほうがいいねと話し合っても、会長がかわって、メンバーが総入れかえになると、結局、また一から同じことのやり直しなのです。そういうふうにするのは時間とお金がすごくもったいない気がします。役所の方がどれほど大胆にそれをやられるのかわからないのですが、もしひっくり返してもいいなら、私たちが何を話し合うべきかというところを話して、それに沿って進めていってはいかがかなと思ふのですが、いかがでしょうか。

○北村委員長 ありがとうございます。

札幌市が主催になったり、補助金を出していたり、それが全体としてどういう数になって、どういうジャンルが年間を通じて見られるのか、あるいは、国際芸術祭だったら3年に一回というスパンですが、どのように行われているのかという全体像を知ることはできるのですか。

主だったところは今おっしゃっていただいたのですが、アートステージがあって、500m美術館があって、芸術文化財団がやっているものがあったり、子どもが相手であれば、

K i t a r aホールのファーストコンサートがあったり、ハロー！ミュージアムとか、出かけて行ったりするお届けアートみたいなものもありますね。全体として、札幌市が直接的なり間接的にかかわっている事業数は大体把握できるのですか。

把握できないとお金を出せませんね。

○事務局 文化部がかかわっているものについては、札幌の文化行政という冊子を毎年つくっておりまして、その中で、主催ではどういったものを行っている、K i t a r aでどんなことをやっている、芸森でどんなことをやっているということが書かれていますし、ホームページ上も公表されています。ただ、札幌市で行っている全ての文化活動を把握し切れていないところがございますが、我々が把握しているものについては、毎年毎年、冊子として整理をしてまとめてありますので、後ほど配りたいと思います。

○北村委員長 問題は、私は10年ほど京都にいましたので、すぐその角を曲がればお寺さんがある環境です。1,000年の都の中で、あるいはローマなどで暮らしている歴史の厚みみたいなものが札幌には欠如しています。そういう文化的な厚みのようなものは欠如していると言わざるを得ないような気がします。

尹委員がおっしゃるように、気づいてみれば隣にアートがあるという気づきはとても大事だと思うのですが、一方で、文化は1年とか10年というスパンではなかなか根づかない面もあると思うのです。100年とか1,000年の時間の中で培われてきたものが文化なのかもしれません。

ただ、それはきょう、あしたに注意したからといってもあさってに直るものではないので、もどかしいですね。それが時間の厚みだと思いますし、気質なのかもしれませんので、なかなかすぐには変わらないところがあるかもしれません。

ただ、行政としては、年間を通じてこれだけのことを提供していますし、その情報をどうやって浸透させていくのか、また、気づいたら横にさまざまなものがあるという状況は常にオープンにしてつくっておかなければいけないと思います。

南副委員長はいかがですか。

○南副委員長 皆さんから今まで聞かせていただいた中で、僕がすごく興味を持ったのは人材です。結局、情報が顔を持っていることがとても大事だと思っております。ただの文字情報だけよりも、そこに顔が張りついていて、どういう顔をしているかに人間は結構反応するのです。そういう意味では、アートキュレーターやアートマネジメントをする人たちをどうやってつくっていくかは大事だと思います。

例えば、アーティストバンクがあったとして、それをどういうふうに活用するかもマネジメントをする人の手腕であるし、札幌市をどのようにアートの的にデザインしていくかも顔が見えている状態でやっていくほうがかえっていいと思っていました。

私が出したもので、アートがあるとはどういうことかということ、遊びがあるということだと思っているのです。遊びがいろいろなところにあることによって、ああ、いいなと思うのです。それはどういうことかということ、例えば、日常的なところでいうのであれば、

空間に余裕がある状態です。空間が広く余裕があって、そこに遊びで何か違うものがぽこんとあるものに対して、私たちは別な言い方でおしゃれ、あるいは、快適だという感覚を持つわけです。私たちの持っている札幌市の都市空間をいかにおしゃれなものにしていくか、どうしたら快適な感じになるかを考えることがアート空間をつくっていくということではないかと思っています。こういうふうにしたらこのまちはもっとおもしろいのではないかという話をして夢を見ていくといいと思います。これが日常的なアートだと思います。

もう一つは、非日常的な部分であり、それはお祭りだと思うのです。例えば、いろいろな音楽祭がありますね。例えば、PMFや今回の国際芸術祭など、いろいろとあるわけです。これをどうやってみんなに知らせて、これからお祭りがあるのかという盛り上がりを見せることができるか、札幌市の中でももう少し統合的にやれるとおもしろいかと思っています。

具体的な話をすると、国際芸術祭があるとします。そのときに、文化部のセクションだけがそういうふうにするのではないのです。例えばアーティストを誰か決め、ごみ収集車何台かにデザインしてもらい、その期間だけ走らせるのです。そういうものがその期間だけ走っているというだけでもちょっとおもしろいわけです。あるいは、ごみ収集車の人たちがその期間だけはちょっと違うデザインの制服を着るのです。そういうことを今度は子どもたちにウオッチさせ、写真を撮らせるのです。今、ごみ収集車が何々地区に出現したとすれば、それをすぐに写してもらって、アップしてもらうのです。そういったものをたくさんアップしてもらって、収集するのです。そして、収集したものを今度は500m美術館みたいなところで、これは誰々が撮影したものであると展示をするのです。何時にごみ収集車が来たぞということで、どんどんアップしていくのです。それをやりながら、ごみの収集の仕方やどうやってクリーンにしているかというインフォメーションもあわせて、500m美術館を使ったアートデザインをするのです。そして、そういうものを国際芸術祭の一環に入れるのです。清掃部のように、ふだんはアートと関係のないセクションを巻き込んでいけるという具体的な例です。そういう方法を考え、積極的にどんどん提案していくということです。

それから、きょうはお1人いらっしやらなかったのですが、以前手売りの話がありました。結局、190万人もの人口がいるわけですから、潜在的なお客さんがいてもおかしくないわけです。しかし、実際になかなか集めづらく、お客さんも来ないと言っています。この辺は、流通をどのように構築していくかという問題だと思うのです。これは、もちろんインターネットの中でつくっていくのも一つの方法であるけれども、顔や表現がぱっと見えて、おもしろいことを何かやっているぞという遊びがあるものをつくっていけるといいと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

人材の育成ということは、富田委員もおっしゃっていましたが、人のつながりや、フェ

ース・ツー・フェースの形で日常的あるいは非日常的な芸術のあり方ですね。一つの例で、ごみの収集車を中心として、アートや身の問題は大変重要な問題だと私は思っていますけれども、今までは積極的にかかわってこなかったわけです。といいますか、かかわる機会がなかったと思うのです。例えば、そういうところにアートの需要を掘り起こして、アートが社会的な問題に積極的にアプローチしていくことが、単なるアーティストバンクではなくて、アーティストたち、あるいはアートの社会的な役割を開拓していくことにもつながると思うのです。

私からですけれども、1期、2期の提言に対してそれぞれどういうことを考えたのかということを書きました。前回、南副委員長から、芸術の産業化に対しては違和感があるという話がありまして、私もそのとおりだと思います。また、今のお話にあった芸術における遊びとか余裕とか祝祭性ということは、経済的な効率とは必ずしも一致しない事柄ですから、矛盾するようなことを言いますけれども、芸術を一つの産業として捉えることは、芸術の需要を掘り起こす、そのごみの収集の問題に芸術がかかわっていくということで、とても重要な役割だと思っています。逆に、産業を芸術化、アート化していくということですね。例えば、市の交通局の中に芸術部門を入れるとか、清掃局に芸術部門を入れるとか、一般の企業の中でも、デザイン部門を持っていたり、コマーシャル部門を持っていたりするところもあるかもしれませんが、今までアートは全く関係ないと思っていたような企業に積極的にアートがかかわっていくということが創造都市では考えられているのではないかと思うのです。

ですから、芸術の産業化も、産業全体というか、私たちの日々の営みそのものをアートにしていくことが考えられないかと思います。それは、南副委員長の言うところの日常的な空間をアート化していくということも同様かと思います。

学生に対して、芸術と芸術作品を区別したほうがいいとよく言います。作品というと、どうしても美術館にあったり、コンサートホールにあったり、劇場に行かなければ体験できないと思ってしまうところもありますが、実は、アートというのは、作品に結実しなくても、つまり物にならなくてもいいのです。人と出会ったときでも、ニュースを聞いたときでも、びっくりしたり、驚いたり、楽しんだり、怒ったりという心が揺れ動くこと自体が非常にアーティスティックな事柄なのだと学生たちには言っています。しかし、余り反応してくれなくて、「おまえら、わかっているか」と言うと、「はい、わかります」と言うのですけれどもね。物だけに限定してしまうと、どうしても狭くなってしまいます。もう少し広げて、物ではなくて事柄というか、事態というか、そこで起っていることですね。それは、フェース・ツー・フェースかもしれないし、今の若い子だったらバーチャル空間かもしれませんが、そこで日々感じること、見つけられること、気づくこと、身体全体で反応できるようなことが全部アートなのだと学生には教えています。しかし、それがどれだけわかっているかどうかわかりません。できれば、札幌市民の皆さんにも、私たちが日々ニュースを見たり、公園で話をしたり、PTAでお母さんたちと話をし

て、ああ、なるほどね、そうねと気づくこと自体がアーティスティックな事柄なのだよと気づいてほしいと思います。

それから、第2期のことに関しては、あそこではアーツセンターと複数形になっていましたけれども、そのことが出ていました。石川委員の話ではバーチャルな形かもしれませんが、バーチャルでなくても、組織として準備室みたいなものもさっさと立ち上げてもいいのではないかと思います。建物ができてからアーツセンターを立ち上げて、どういうマネジメントをしましょうか、どんな人を育てようかというのはもう遅いです。ですから、さっさと準備室みたいなもの、あるいは、カウンスルもそうですけれども、働かせて、できたときにはそこにすぽんとはまって実質的に稼働しているという形でも時期的にはいいと思っています。そこで、フェース・ツー・フェースな形で、あるいは、どういう人材の育成の仕方があるのか、マネジメントの仕方があるのか、どういう人たちを対象にして仕事をするのかということは、具体的なことは実際のところで詰めていただければいいと思うのですが、やるのだったら、大変ですが、札幌市でもうお始めになったらどうかと思いました。

もう一つは、アートへの市民のかかわりということで、富田委員はアーティストの立場で世界にどんどん出ていけ、待っていては駄目だ、打って出ろというお話を前回されていましたが、いろいろなかかわり方がります。例えば、今、芸術の森では、Rゼロでしたか、ゼロ歳からの美術と言っています。僕は、世代論は余り好きではないのですが、実際には尹委員が言ったように、児童とか、生徒とか、これから10年先、20年先に経験したことを思い出してくれる人たちと、現役の仕事が終わって、多少時間に余裕がある方であれば、ボランティアになったり、サポーターになったりというところに生きがいを求める方もいます。

ですから、190万の人を同じ水準で見ることはできないような気もするのです。それぞれの世代で、例えば現役世代だったら年に1回コンサートに行ければいいか、あるいは舞台を見る機会があればいいか、僕も頑張って年間に30本か50本ぐらいは美術展やギャラリーに行こうと思っているのですが、なかなか難しいですね。だから、現役の方たちにどういう手当ををするのか、それから、仕事を終えられた方々にどういうふうにアートにかかわってもらえる場を提供するのか、それから、若い世代、これから未来を担う世代に対して、どういう体験の場、経験の場を与えてやるのかというある種の世代的な問題も考えていいと思います。そこに、ディレクターとか、マネージャーとか、コンシェルジュというのは石川委員の言葉でしたが、比較的上からサポートして、あるいは、アーティストをサポートしてくれるような人もとても大事です。

それから、ボランティアですね。今、近代美術館にアルテピアというボランティアがいます。本当にボランティアなのかどうかわからないのですが、自発的な意思で自分のやりたいことをやるのがボランティアですから、一つの組織をつくって、あなたはこれをやりなさいとか、これをしてくださいという単なる無給の仕事をする人ではないです。

例えば、国際芸術祭でもボランティアを募集していますが、私はこういうことをやりたい、では、やってください、私はこれをやります、では、これをやってくださいと、みんなが別々の方向を向いていると交通整理がなかなかできません。多少の交通整理は必要ですけども、自分のやりたいことを実現するような全体の組織があってもいいのかなという気がしています。それもなかなか難しいですけどもね。いろいろなボランティアの組織があって、お金だけ出して何も言ってくれない人が一番ありがたいサポーターかもしれませんけれどもね。

それでは、これで皆さんの一通りのお話を伺いましたね。

あと少ししかないのですが、これからは自由に発言していただきたいと思います。

まず、皆さんがおっしゃっていることに対して、これはどういうことなのかという意見なり質問なりがあればお伺いします。

まだじっくりきていないのは、札幌市がこれから打ち出そうとしている共に創るという共創という考え方です。これは、どういうことをお考えになっているのでしょうか。

○事務局 今、札幌市文化芸術基本計画というものがあります。実は、文化芸術基本計画は5年物の計画となっております、今、21、22、23、24、25ということで、来年度からの新しい計画を今つくっている最中です。その会議は、学識経験者の方や文化団体の方が10名ぐらいで構成されていて、今まさに議論をしていただいております。市民の意見を聞くために、教育文化会館でワークショップを行ったりしながら、内容を精査しているところでございます。

共創の概念についてですが、前にお配りした「花開く創造都市へ 私たちがやるべきこと」という資料をお持ちであれば、22ページを見ていただきたいと思います。

計画推進のための視点、共創という形で打ち出しております。書かれている内容は、まちづくりや文化芸術の関心も高まり、これまで文化芸術を主に享受する側であった市民の立ち位置が変化し、時には市民が事業の主体やアーティストとかかわるなどの変化が見られます。札幌の文化芸術は、行政ではなく、市民も担う未来へと変化が求められていますという形になっています。今まで、市民は享受する側だけという形で捉えていたのですが、そうではなくて、あるときにはアーティストにもなるし、あるときには支援する側にも回る、そういった形でともに創り上げていくという意味で共創という概念を打ち出しております。ただ、造語でもありますので、なじみが薄いところはございますけれども、そういった概念に基づいて打ち出しているところでございます。

○北村委員長 ありがとうございます。

ある意味では、第1期で提言された3者をもう少し流動的にというか、アーティストと行政と市民の役割を分担するのではなく、それぞれのアーティストも享受する側だし、行政もつくる側になるかもしれないということですね。そういう考え方なりを、今日もそうですが、どうやって市民に浸透させるか、どういうふうにそれを理解して、特に共創というのは造語ですから、私は芸術と全然関係ないよと思っているのは190万人のうちの1

89万人ぐらいだと思うので、そういう人たちにどうやってこういう考え方を浸透させていくのか、ウェブを使えばいいのか、どういうふうに情報を共有すればいいのか、情報ステーションのようなものやアーティストバンクみたいなものがあるけれども、それがなかなかしみ込まないのはなぜでしょうか。そんなことが解決すべき問題としてあるかと思っています。

もっと言えば、札幌市民あるいは自分たちの活動がアーティスティックなものなのだと自己認識することでもあるし、それを上から目線で認識しろと言ってもだめなので、どうすればいいのか。ですから、それはある意味で1期の提言に対する見直しというか、バージョンアップみたいなことですね。

ほかの皆さんから気がついたことはありますか。

○山田委員 今の共創の部分の市民の皆さんへの浸透化を考えていくと、先ほど南副委員長がおっしゃっていたアート空間の創造という部分は、これを具体的にどうこうは後にして、アート空間、遊びの空間、快適でゆとりのある空間をどうするかというものが一つあると、そこを目指して具体的にどうつくっていくのか、そこを目指して市民の皆さんにどう伝えていくかというところが一歩進める感じがしました。

○北村委員長 札幌市で、一種のアート空間として創造するために具体的にどんな方策を考えてみるかということが私たちのテーマとなり得るという話ですね。

○伊委員 多分、細かい話になってくると思うのですがけれども、先ほど南副委員長がおっしゃっていたごみ収集車の話もすごくすばらしい提案だと思います。そういう具体的な提案を話し合っていくべきなのか、大まかな方向性を話し合っていくべきなのか、どちらでしょう。私たちはどちらを話していけばいいのか。例えば、共創を市民に浸透させるためにどういう方向に行けばいいのかということをお話すべきなのか、専門分野の方が多いので、具体案のほうが出てくるような気がするのです。ですから、どっちを話せばいいのか、ちょっとよく見えないのです。

○南副委員長 僕は、ここで具体的な話をどんどんしてしまったほうがいいと思うのです。その具体的な話の中から、今度はこうする、それだったらこういうふうに立つだろうというふうになると思います。最初から抽象的な話だと、ずっと宙を回っているだけになってしまうと思うのです。ですから、目の前にある話として、公園の遊具をいかにおもしろくするためにはどうしたらいいかです。

私たちがなぜアート、アートと騒ぐのかというと、気持ちよくなりたい、そして、空間的に快適でありたいからです。生活が楽しくありたい、豊かでありたい、そして、おもしろいという気持ちを日々持ちたいということがアートを第一にしている理由です。

基本は、日々の生活が楽しく感じられるようになるにはどうしたらいいか、あるいは、気持ちいい、快いと思えるところにいるというふうを感じるにはどうしたらいいかということだと思うのです。どうやってアートを人々に見せるかではなく、楽しいとか気持ちいいと感じさせるようにすることこそ、極端に言うとアートがあふれているとことだと思

うのです。

○伊委員 それでは、具体的な企画をぼんぼん話していったいいのでしょうか。

○南副委員長 そう思います。

○事務局 事務局から補足させていただきます。

この円卓会議のおもしろさであり、難しさであるというのが、まさに今、皆さんが議論されているところかと思っています。分析的な現状の把握という話と、理念的な中長期的な話と、具体的に何をやるのかという話になろうかと思っています。それは、事務局でこの場所を議論してくださいというのではなく、満遍なく議論していただいても構いませんし、今、南副委員長がおっしゃったように、具体的な話を中心にしっかりやっつけていこう、それがひいて理念にもつながっていくし、現状分析にもつながっていくのだということもありますので、それはこの円卓会議のメンバーで決めていただいでよろしいかと思っております。

○北村委員長 先ほど尾崎委員は、具体的なことをやらないとずっとさまよっているみたいな感じだとおっしゃいましたね。それは、基本的に南副委員長と同じ意見ですね。

○尾崎委員 僕もそう思います。まさに、最初から出ていたアートセンターという建物を建てて初めてそこからというものではないのだから、早々につくったらいいのではないかという話が最初から出ていますが、まさにそういうことのように思います。どうやったらそういうことになっていけるのかまで含めて話をすると、より具体的になると思います。それだけではないですけども、観光文化情報ステーションも、ああいう形がいいのかどうかということは、本当に細かい話になってしまうので、一つか二つとか話ができないかもしれませんが、どういう経緯でそういうふうになったのかということが話し合われていくといいと思います。

○北村委員長 清水委員はどうですか。ばらまきにならないという予算のことも私たちはわからないのだから、もう少し的を絞ったということは、具体的な事柄よりももう少し抽象的なレベルでお話ししたほうがいいということでしょうか。

○清水委員 今の議論を聞いて思ったのは、具体的なものも数を集めて、さらにそれを分析すれば見えてくるものがあると思うのです。例えば、次回までに、1人100本は多いと思うので、30本ぐらいずつ小さいアイデアを全員が書いてきたものを見て、そういうものを分析すると、それぞれの委員が何を対象に考えているのか、どういうところを重要に思っているのか、さらに自分にはない気づきを発見することができます。私もそういうプチアイデアなら本当にたくさんあるので、30本ぐらいずつ出してもらって分析するというのはすごく意味があると思います。

○北村委員長 宿題が出そうですね。要するに、帰納法というか、具体的な事柄をいっぱい集めて、そこから抽象的な問題を取り上げていくという一つの方法論だろうと思います。富田委員はいかがですか。

○富田委員 具体化しなければいけないのです。ここの全てを見てもそう見えるのです。

あとは5年というスパンでどう考えるかです。目先のことばかり考えてもいけないだろうし、ある種の軸を決めたいというところもあるかと思います。

今、総花という言葉がたくさん出ているのですが、総花になったもので、どこにプライオリティーがあるか、どこから手をつけるとそれが回り出すのかというところで考えてもいいと思っていました。

そこで、結論というわけではないですが、それを動かすのは人であるということと、今、具体的な話をどんどん進めたいといったときに、では、誰がどのようにそれを担うかという視点は絶対に出てくると思うのです。誰がやるかをすぐに決めなくてもいいのですが、それを担う人材が必要ではないかというものがどうしても頭に出てきてしまうのです。

僕はアーティストですが、先ほどから出ている共創という概念についても、文化芸術に対する理解というのは、もちろんアーティストが身をもって示していかなければいけないと思っています。そのときに、そのアーティストのレベルがしっかり担保されていなければ、何でもいい、わけのわからない残念なお祭りになってしまうと思うのです。あとは、パブリックにかかわって、パブリック性ということも理解ができている人ですね。それをキュレーションするにしても、それがちゃんと編集できているということが前提になってくると思います。

もっと言えば、打って出なければいけないということを北村委員長がおっしゃっていましたけれども、僕は、それだけではなくて、リサーチをしたり、そういう人がどんどん世界でも、世界と結びと言っているのでも、いろいろな人たちがぐるぐる回る必要があります。こちらにも来る必要があるし、こっちからも出て行って、実際に体験するということですね。先ほどベネチアの安藤さんの話が出ましたけれども、やはり空間に行ってみないと、それがどういう価値があるのかはどうしても情報だけでは伝わらない部分があると思うのです。

また、人として考えると、先ほど顔のある情報と言っていましたけれども、情報についてもちゃんと実がなければいけないのです。情報だけを整備してそろえても余りよくなくて、実体験をもとに、これは本当にこれだけの価値があるのだということを、アーティストなり、キュレーションをする人なり、ディレクションをする人は、熱く語っていかなければいけないのではないかと思います。そういうものができてきて初めて、ようやく形のあるイベントなのか、国際芸術祭になるのか、意味のあるものになっていくという順序なのかと思っています。

○北村委員長 ありがとうございます。

石川委員はどうですか。今、顔が見えるという話がありました。それは、ある種、インターネットの中とは違う、もう少し実態的な世界をつくるべきだということだと思います。

○石川委員 僕は、インターネット、インターネットと書いてあるので、バーチャルなことがいいのだというふうに思われるかもしれませんが、私が、今回、ウェブサイトというふうに絞ったのは、とにかく実際的な話がしたかったのです。1期で理念、2期でアーツ

センターというリアルな建物、では、3期はバーチャルぐらいがいいのではないかと
ことで絞っただけなのです。

バーチャル、インターネットというのは、皆さんに難しい印象を与えているのかもしれ
ませんが、別にそんなに高度なインターネットの話をしよというわけではなくて、イン
ターネットというのは双方向のメディアなので、そんなに難しい専門用語を使って議論を
するということではありません。インターネットに、今までの話にあったアートの教育を
するようなコンテンツがあったり、アーティストバンクがあったり、こういうものがあ
ってこういうやりとりができればいいねということなのです。実際にこういうテクノロジー
を使ってこういうことをやるということではなくて、市民がアートなどに関心を持って
もらえるようなホームページとかウェブサイトというのは、こんな情報があったり、こんな
やりとりができれば、今、我々が目指そうとしているものができるのではないかと
いうことなのです。

今、清水委員がおっしゃったように、30本、100本考えるというのは、僕は結構好
きです。結構いいなと考えていました。逆に、僕のメディアづくりはやめて、第3期は1
00本考えましたというのでも悪くはないと思っているのです。なぜかというと、僕は、
小さなリスクのない実験的なことをたくさんやって、その中で反応を見ながら進めるとい
うことは割と好きなのです。ただ、今思ったのは、ただ100本を考えただけではい
けないと思うので、その100本を考えるベースの理念はちゃんと考えて、その理念に基
づいて100本考えましたと。理念もあるし、実務的な企画もある、そういうスタイルが
いいのではないかと思います。

○北村委員長 ありがとうございます。

少しずつ固まってきたように思います。一つは、私たちのこの円卓会議の第3期のミッ
ションをどう考えるかということだと思います。100年先を考えても仕方がないし、
私たちがどうこうできるものではないかもしれませんが、ただ、5年か10年ぐらいの札幌
の将来を見据えて、アートはどんな仕事ができるのか、アートをどういうふうに市民に浸
透させていくことができるのかというぐらいのスパンかなという感じがします。

それは、アートセンターのこともあるでしょうし、コミッションのこともあるでしょう
し、石川委員がおっしゃっているインターネットなどもそういう方策の中の一つとして、
具体的なものの一つとして考えることもできるでしょうし、実際にどういうふうに人材を
育成するのか、アートセンターがどんなふうに機能するのかということも考えなくては
いけないと思います。ですから、時間的な幅としてはそれぐらいかと思います。ですから、
100年先の文化全体のことまではなかなかいけないと思います。ただ、こういうことが
一つのきっかけになって、私たちがお墓の中にいる100年後に、ああ、100年前にこ
んなことを考えていた人がいるのだねということが文化だと思えますし、歴史だと思
うのです。

皆さんに宿題が出ますね。

それぞれ得意分野があると思います。舞台をやっておられる方がいたり、インターネットの得意な方がいたり、実際に作品をつくってみたり、市民生活の中で気づいたことがあったり、子育てをしている中でこうあったらいいなというように、それぞれ皆さんの得意分野のところで、さっき清水委員が出された宿題を……。

○伊委員 10本くらいでいいのではないのでしょうか。

○清水委員 90はいきますよ。

○畠田委員 1人10本ちょっとやれば100本になりますね。

○北村委員長 それが全部ばらばらであるとは限らないですね。それも非常に日常的なレベルから、ちょっと抽象的なレベルまで、いろいろな問題が出てくると思うのです。それは、すぐに整理するというわけにもいかないの、出てきたものを見ながら、帰納法的な形で、ここで一体何が根本的な問題となって皆さんはこういうテーマを取り上げているのかという理念がないと、ただアトラダムに問題を取り上げたということで、ばらまきになってしまいます。そこは、行く先々では注意をする必要があると思いますね。方法論としては、帰納法的な形で、5年ないしは10年ぐらい先を見据えたテーマを皆さんにこれからお考えいただいて、少しずつまとめていくという方向でしょうか。南副委員長はどうですか。

○伊委員 いい企画だったら採用していただけるのですかね。

○北村委員長 こっちが宿題をしているのだから、札幌市もちゃんと宿題を片づけていただいてね。それをやっていただかないと、宿題は出しましたけれども、採点しないままずっとノートを取り上げられているという状態は余り心地よくないですからね。

南副委員長はどうですか。

○南副委員長 まさにそのとおりだと思いますので、よろしくをお願いします。

北村委員長がおっしゃっていた産業の芸術化という言葉でしたね。産業の芸術化というのは、本質的に意味のあることだと思うのですよね。生活の芸術化でもいいですし、そういった私たちの営みをどうやって芸術化していくか、そういうことも一つのキーワードにしながら、また、せっかく共創という言葉があるから、これを頭に置きながら考えて、宿題をやっていくというのが取っかかりとしてはいいと思います。ちょっと違うものが出てきてしまっても、まあ、いいかという感じで出してみたら、結構おもしろいかもしれません。

○北村委員長 皆さん、どうですか。

山田委員、大丈夫ですか。

○山田委員 考えます。

○北村委員長 では、清水委員の宿題をちょっと和らげて、30から10ぐらいにさせていただいて、少しずつ固めていくということにしたいと思います。

○清水委員 ちょっと確認させていただきます。基本的には自由で、私は、南副委員長が言われたごみ収集車のアートから、別の分野の方向につなげたというすばらしいと本当に

思ったのです。それは小さいことかもしれないけれども、すごく具体的で効果が見えるような案を考えるということですね。

例えば、アートセンターやアーツカウンシルがこうだったらいいなというものも入れていいのでしょうか。

そういうものもいいのですね。

また、ちょっと関係ないかもしれませんが、この話をした後に、富田委員のお話を聞きながら、スプツニ子のことをふと思い出しました。応募用紙にも書いたのですけれども、ドラティカルデザインの話がすごく好きで、アートがあることによってみんなに何かを考えさせるというか、とにかく一石を投じるというか、そういうムーブメントなのです。先ほどから、興味のない人にどうやって興味を持ってもらったらいいのだろうと言っているのですけれども、いいよ、いいよ、アートはいいよと言うよりも、えっ、こんなというようにびっくりさせるようなことを言うと、もしかしたら興味のない人もびっくりして見てくれるかもしれないと思いました。

おもしろい案がいっぱい出てきたらいいなと思います。私も頑張って考えます。

○北村委員長 ありがとうございます。

びっくりさせるのもなかなか難しいのですけれどもね。

では、第3期の円卓会議では、時間のスパンとしては5年から10年ぐらい先を見据えて、小さなことからコツコツできるような案を取り上げながら、そういう案が出てくる背景には一体どんな問題があるのかということ私たちは探って、それをなるべく市民の方々と共有してもらえようように情報を発信していくという形でこれから進めたいと思いますので、どうぞよろしくをお願いします。

では、事務局に返します。

○事務局 ありがとうございました。

3. その他

○事務局 宿題の期限と様式につきましては、後ほどお送りさせていただきますので、どうぞよろしくをお願いします。

もう一点、次回のスケジュールですけれども、第3回目は4月下旬から5月中旬をめどに開催したいと思っていますので、確定次第、各委員にご連絡させていただきたいと思っております。

4. 閉 会

○事務局 それでは、第3期札幌文化芸術円卓会議の第2回会議を終了します。

皆さん、どうもありがとうございました。

以 上